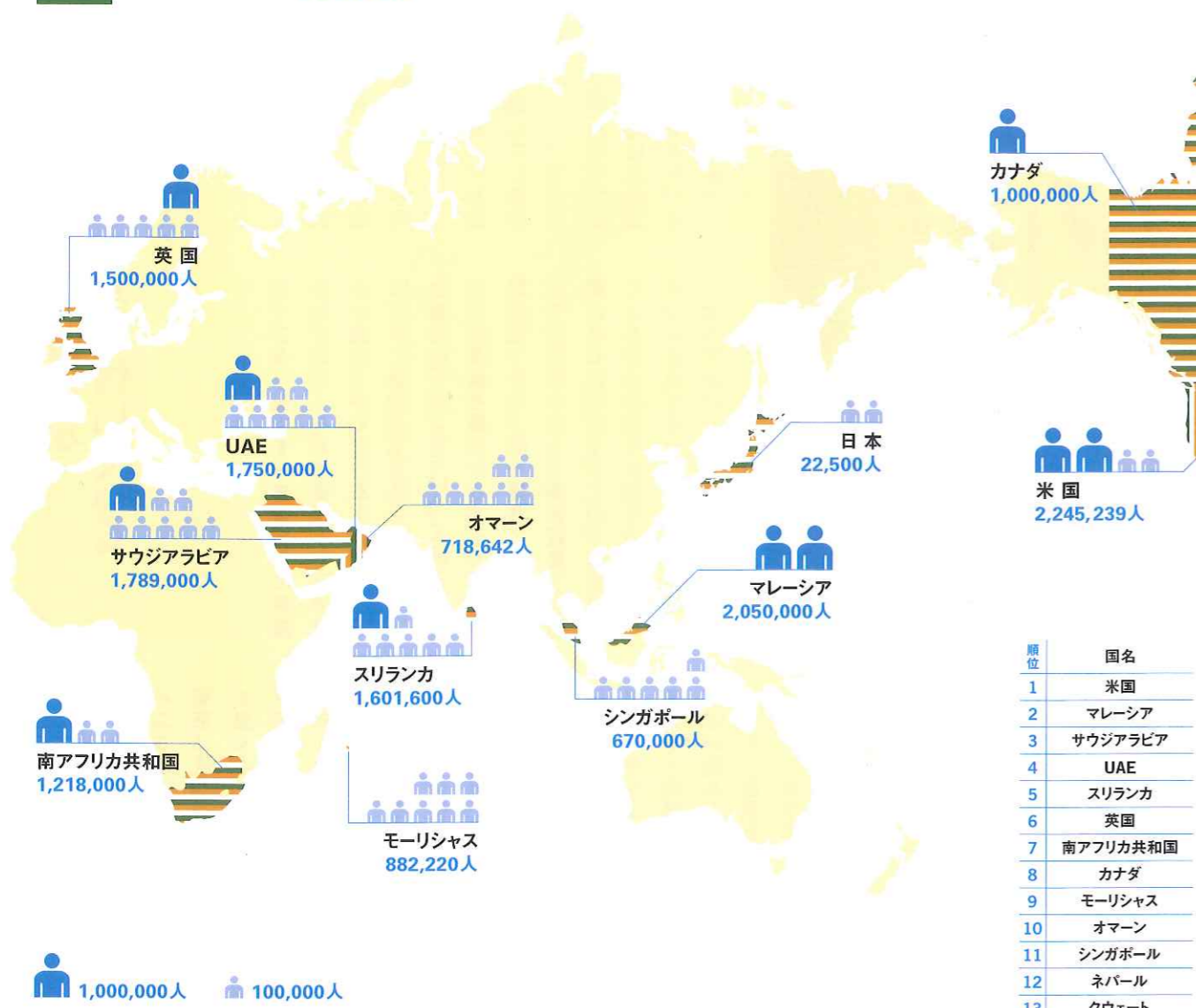


■ 在外インド人の数

印僑は世界に約2190万人いるといわれている



資料：ministry of overseas Indians affairs (2012年5月時点) ホームページより抜粋

インド以西に広がる 印僑の奥深い世界

間同士が知り合うときに共通していることですが、海外ではなおさらそれが大事です。あと、基本は楽しむことですね。あなた、どこから来

たの。どういう話を持ってきたの。日本はどういうところなの、って。経済の交換も人間関係も、全ては「違い」から始まるのです」

印僑は、世界に二〇〇万人以上いるといわれている（内訳は左地図）。東アジアでビジネス界を牛耳るのは、主に華僑ネットワーク。押さえておくべき幹部やディストリビューターはたいてい華僑で、金融のハブとなっているシンガポール以外では、印僑はあまり存在感がない。一方、中東、アフリカに入ると突如として印僑の世界が広がる。特にドバイにはアラブ人三〇万人に対し

て三倍のインド人がいて、実務レベルの商談でしょっちゅうインド人が出てくるといいう。アフリカにはインド人の公務員が多く、企業のオーナーは現地人でも、番頭や幹部がインド人というケースが多い。最近では欧米の英語圏の国々で、経営者として力を発揮するインド人も増えている。このような地域ごとの特徴は、歴史的背景によるものらしい。「大英帝国最大の植民地であったインドで

は、当時多くの人たちが、マレーシアのゴムプランテーション、ミャンマーの米作などに労働者として送り込まれました。それらは貧しい地域出身の人々で、今でもビジネスへの影響はさほど大きくないとされています。一方、それより数は少ないですが、ゴアなどインド南部・西海岸にいたヒンドゥー商人やムスリム商人、グジャラートの繊維商人らが活躍し、北インドからは軍・警察を担う人材が旧英領に渡りました。中東、アフリカの印僑ネットワークはこれがルーツといえます」（みずほ総合研究所調査本部アジア調査部・酒向浩二主任研究員）。

インド独立後はこうした移動は減ったが、例外として、七〇年代から中東の石油プラントなどの建設現場に、エンジニアや労働者として出稼ぎに行く人が増えた。その後、高等教育を受けたインド人が英国、米国に留学し、現地で大企業の仕事を得るのが立身出世の典型となり、米国シリコンバレーでも多くのインド人が活躍。最近でも、ペプシコ初の女

順位	国名
1	米国
2	マレーシア
3	サウジアラビア
4	UAE
5	スリランカ
6	英国
7	南アフリカ共和国
8	カナダ
9	モーリシャス
10	オマーン
11	シンガポール
12	ネパール
13	クウェート
14	トリニダード・トバゴ

インドは人類の メルティングポット

「大物印僑」が続々と生まれる背景について、インド・ビジネスセンターの島田卓社長は「インドは米国と同じく、人類のメルティングポット。育つ環境が日本と全く異なります」と話す。インドでは、人種も言葉も

宗教もばらばらの人々が混然一体となって暮らしている。その中で自分の価値を高め、存在感を示すのが生きる術として身に付いているというのである。「日本では沈黙は金といいますが、インドでは沈黙は死を意味します」（島田社長）。インド人には、現代のグローバル経済を生き抜くたくましさがあるのだろう。

また、リスクを怖がり、子供に「No」ばかり言う日本の教育に対して、インドでは「Yes」から入る。「インドの人は失敗した場合でも、くよくよせずに前に進むとうまします。終戦直後、インド初代首相のネルーさんが来日され、珠玉の言葉を残しています。『The past is past（過去は過去）』。終わったことは忘れ、明日のことを考えましょうと。日本人とは逆の精神構造でしょうか。この前向きな気持ちは、いろいろな事業発展につながる。失敗をさせない教育は、製造業で国が成り立っていた時代は良かったかもしれませんが、時代は大きく変わりつつあります。日本ももっと思考を鍛えるべきから入る教育」に転換すべきでしょう」（島田社長）

経済グローバル化の波が押し寄せる今こそ、印僑の知恵が役に立つ。



インド政府主催で毎年開かれる「印僑大会」の様子。大物印僑が一堂に会す（インド政府広報局提供）